

〈研究ノート〉

## 談話の中の「てみる」 —文法的意味と後続文の解釈、フェイス威嚇行為—

吉 田 朋 彦

### 【要旨】

本研究では、最初に、「動詞＋て＋補助動詞みる」（「てみる」）の文法的意味を、複文と談話の中での使用を考慮して再検討し、「意図」と「行為」、「認識の更新」という三要素で構成されるという説を提示した。次に、この説に基づいて、二つの語用論的現象を考察した。一つは、主に「てみると」と「てみたら」に続く節と「てみる」の直後の文が、「てみる」の意味に合わせて解釈できるということである。もう一つは、Brown and Levinsonのポライトネス理論から、「てみる」が助言と指示、挑戦を表すとき、フェイスを脅かす程度の緩和と強化に貢献していることを説明したことである。

キーワード：てみる、補助動詞、みる、ポライトネス

### 1. はじめに

教員が学生に指示を与えるとき、「それでは問題1から考えてみましょうか」のように「動詞＋て＋補助動詞みる」（以下、「てみる」とする）を用いることがある。また、インターネット上の新製品の紹介記事に「てみる」を用いた題名が付けられているのを目にすることがある。例えば「A社の新製品を使ってみた」のような場合である。もちろん、「考えましょうか」と「使った」を用いたとしても、指示や題名として不適格な表現とは言えまい。しかし、「考えてみましょう」「使ってみた」の方がより柔らかい印象を受け、その分だけより適切な表現と感じられる。では、動詞の意志形やタ形ではなく「てみる」を選択する動機はどこにあるのだろうか。

本稿の目的は、先行研究を概観しながら、「てみる」の文法的意味を検討し、それに基づいて談話の中での機能について考察することである。2. では、吉川（1975）や森田（1989）など用法や文法的意味を扱った研究を振り返り、「てみる」が表す意味を検討する。そして、その結果に基づいて、談話の中の「てみる」を、先行研究（笠松，1989、市川，1990）を示しつつ考察する。具体的には、「てみる」が後続文の解釈にどのように影響するかについてと、談話（会話と文章）のなかで、聞き手と読み手（以下、一括して「聞き手」とする）に対する

働きかけの機能を持つ発話における「てみる」についてである。後者については、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論の視点から、助言と指示、挑戦という三種類の発話行為で、「てみる」がフェイス威嚇行為を緩和あるいは強化することを述べる。

## 2. 「てみる」の文法的意味とインパーフェクティブ性

### 2.1 「てみる」の文法的意味

「てみる」は、国語辞典等では例えば「試しに……する意を表す」(『明鏡国語辞典』第三版、p. 1600) のように記述される。このような記述は、典型的な意味を非常に明快に表わしている。しかし、「てみる」が表す事態の特徴を具体的に捉えようとするなら、「てみる」の意味の内部構造を詳細に検討しなければならない。本節では補助動詞研究としての「てみる」の先行研究を概観し、「てみる」が表す事態の継起性に着目して、その意味記述の一つの仮説を提示することにする。次節では、「てみる」の意味が、アスペクト研究における「インパーフェクティブ」(Comrie, 1976) と類似していることを指摘する。

補助動詞の記述的研究として高橋 (1976) <sup>1</sup>がある。高橋は、「している」「してある」「してみる」などのいわゆる補助動詞を含む形式九種を包括的に論じている。その中で、「すがた (aspect)」と「もくろみ」の区別が立てられ、「してみる」は「もくろみ」、すなわち「動詞の表す動作がなんのためにおこなわれるかをあらわす文法的な意味」(p. 141) を表す形式の一種とされる。そして、「してみる」は、基本的には意志動詞とともに用いられ、試しに何かをすることや、「体験する動作」「実現する動作」が実際に行われることを表すという (pp. 142-143)。そして、この形式が表す動作によって新たな認識や事態が生じることも指摘されている (p. 143)。

吉川 (1975) は、「～てみる」の意味を、前接する動詞の分類との関係で検討し、さらに、連語と文、コンテキストのレベルを考慮して考察した。それによると、「～てみる」の意味は次の三種類である (p. 39ff)。「(I) あることを知るためにある動作をすること」(意志動詞のみ。例「そっと指先でさわってみる」)、「(II) ある動作をした結果の状態を知るためにその動作をすること」(無意志動詞も可能。「池内という男に俺が会ってみよう」)、「(III) ある情報をもたらし、または結果を生み出すことになる動作をあらわす」(「帰国してみると、日本は十一年の間に目覚ましい移り変わりを見せていた」)。

森田 (1989 : 1103-1104) は、「～(て)みる」を「他の目的のため、その動作を試みに行う」とし、意志性の動詞のとき「“ために……する”という実験的試みの意図を持つ」と分析した。また、無意志性の動詞は、条件形式を表す文型(「……てみると」など)で用いられ、動作や行為の「無意識のうちにおこなった結果の状況」と自然現象が「成立した時点の状況」を表すとする。

また、日本語記述文法研究会(編)(2009 : 137-139)は、「てみる」の基本的特徴を二つ認めている。その一つは、試行を表す「てみる」で、「結果・影響がどうか分からない状況で、そ

れを確かめる目的をもって意志的な動作を行うことを表している」(p. 137) という。例は「名前だけ知っていて味は知らなかったけれど、食べてみた。」である。この場合、「無意志動詞＋てみる」は用いることができない(ただし希望の「たい」が後接する場合は可能とされる)。もう一つは、「事態出現への気づきを表す「てみる」で、条件文や、「1人になってみて初めて家族の大切さがわかった。」のような、「継起を表すテ形の複文」で用いられるという(p. 138)。

これらの研究の記述の中心は「動詞＋てみる」が表す動作であり、意志動詞の場合は何らかの意図や目的をもってそれが行われるということである。では、高橋(1976)が言及している動作後の事態をどのように位置づければよいのだろうか。先行研究の中では、田中(2000)が、「てみる」の「みる」の意味に、結果認識の意図から結果への関心までに対する「〈認識志向態度〉」(p. 101)と「報告者の現場性を顕著にする役割」(p. 103)を認めている。しかし、「てみる」の意味記述に焦点を合わせていて、「てみる」と後続する節や文との関係性については本研究と見解が異なっている。本研究はむしろ、後述する松木(1997)による、条件表現前件の「てみる」節と後件との関係の考察と、笠松(1989)による、段落の中の「てみる」に後続する内容に「結果としてわかった出来事」(p. 17)などがあるという指摘を考慮し、「てみる」が表す事態を時間軸に並んだ継起的な事態として捉えるべきではないかと考える。

この視点から「てみる」を検討するために、まず(1)と(2)を比較する。

- (1) 私は教室のドアを開けた。
- (2) 私は教室のドアを開けてみた。

(1)も(2)も、文法的には適格で、必須要素が脱落しているわけではない。しかし、筆者の直観では、(1)は「ドアを開けた」という動作に焦点が合っていて、その意図や目的、結果の事態を含んではいない。それに比べ(2)は、何のために「開けてみた」のか、その後どうなったのかが述べられていないという直観がある。すなわち、(2)は、文としては正しくても、意図や目的とその後の事態については情報不足なのである。

次の(3)と(4)は、意図が明示される場合である。

- (3) 誰か残っていないかと思って、教室のドアを開けた。
- (4) 誰か残っていないかと思って、教室のドアを開けてみた。

(3)が表す事態は、動作者が残っている人を確認するという意図を持っていることとドアを開けたことであるのに対し、(4)は、それらに加え、その後教室の中に人がいたかどうかを確認することも表される。この比較から、「てみる」は、動詞が表わす動作だけでなく、その後の事態までを意味することがわかる。ただし、その後の事態についての情報は無い。

そして、「ドアを開けた」あとの事態を加えた(5)と(6)を比較する。

- (5) 誰か残っていないかと思って、教室のドアを開けた。Aさんが残っていたことを確認した。
- (6) 誰か残っていないかと思って、教室のドアを開けてみた。Aさんが残っていたことを確認した。

(5) は、「誰か残っていないかと思った」こと、「教室のドアを開けた」こと、「確認した」ことが、継起的に生じたことのみを表す。一方、(6) は、この三つの事柄—それを本稿では広い意味で「事態」と呼ぶことにする—を、「行為」を中心とした「意図」「行為」「結果」という一連の事態として表して、必要な情報がすべて備わっている。

さらに、(6) の第三文を次のように変更しても、談話として不自然にはならない。

(7) 誰か残っていないかと思って、教室のドアを開けてみた。誰も残っていなかったことを確認した。

このことから、「てみる」は結果となる事態が何であるかを具体的に指定することはない。

そして、4. で詳述するが、この「結果」とは、結果の事態のいわば中立的な叙述ではなく、「行為」の結果生じた話者・動作主の「認識の更新」である。つまり、「てみる」は、話し手がその行為によって自分の認識を改めることを表す。(6) と (7) なら、「教室の中に誰かが残っているかどうかわからない」から「Aさんが教室にいた」または「誰もいなかった」ことを知った状態へと、自分の認識を変化することを表す。

以上を、意義素論・現象素論（国広，1982など）の意義特徴の表示方法に従って表せば、次のような一連の過程になる。

〈話者／動作主がある意図を持って〉〈ある行為を行い〉

〈その結果によって話者／動作主が認識を更新する〉

これを略記するなら、「意図」「行為」「認識の更新」となる。

類例は(8)と(9)である。

(8) 私は、知らない英単語に出会ったとき、いつも辞書を引いて意味を確かめる。

(9) 私は、知らない英単語に出会ったとき、いつも辞書を引いて意味を確かめてみる。

(8) は、習慣として辞書を引くことは明確に表現されても、その後の結果の事態が想起されにくい。一方、(9) では、話者の意図は「未知の英単語の意味を確認したい」であり、行う行為は「辞書を引く」である。そしてその結果「話者は語の意味を正しく理解していたかを確認するか、あるいは新しい意味を知る」ことになる。

この記述に加え、これらの意味のどこに焦点を合わせるかによって、異なる事態を表すことができる。(10) は、(2) と同じく、行為のみに焦点が合わされている場合である。

(10) 開ける前に封筒を振ってみた。

「何が入っているか知りたい」という意図と、その結果の認識の更新は表現されていない。

(11) は、(4) と同じく、意図と行為に焦点がある場合である。

(11) ドリアンは食べたことがなかったが、思い切って口にしてみた。

ここでは、「ドリアンを食べること」が動作主にとって初めてであるから、「口にしてみた」で「試しに食べる」ことを表す。

そして、無意志動詞が用いられると、意図はなく、後件で出来事とその結果生じる話者の認識の更新のみが表現される。例は(12)である。

(12) いざ年が明けてみれば、いつもように慌ただしい毎日が戻ってきた。

これまで、「てみる」の事態がどのような形式によって表現されるかについては述べてこなかった。しかし、その事態の十全な表現は、複文あるいは談話によって実現すると考えられる。なぜなら、(6)の事態は、必須要素のみを備えた単文によって表現することはできないが、しかし、(13a)のような複文として、あるいは(13b)のような単文の集合、ここではすなわち談話として表現することが可能だからである。

(13) a. 誰か残っていないかと思って教室のドアを開けてみたら、Aさんが残っていたことがわかった。

b. 誰か残っていないかと思った。それで、教室のドアを開けてみた。Aさんが残っていたことがわかった。

## 2.2 インパーフェクティブとの類似

(1)と(2)で示した「てみる」の有無による対立は、動詞のル形・タ形とテイル形の対立、すなわちアスペクトのパーフェクティブ(perfective)とインパーフェクティブ(imperfective)の対立と類似している。Comrie(1976:3)によれば、アスペクトとはある事態の、内的な時間構造のさまざまな捉え方である。そして、パーフェクティブとは、事態を全体として、事態の時間的構造と関わりなく捉える見方である(p.12)。一方、インパーフェクティブは、ある事態をその内部から捉え、「継続(Continuous)」と「習慣(Habitual)」に分かれ、さらに「継続」は「進行(Progressive)」と「非進行(Nonprogressive)」に分かれる(pp.24-25)。日本語の述語動詞のアスペクトでは、動的動詞のル形とタ形はパーフェクティブ((14)と(15))、テイル形はインパーフェクティブである((16))。

(14) 私は図書館に行く。

(15) 昨日、私は図書館に行った。

(16) a. 雨が降っている。(進行)

b. 枝が折れている。(結果の残存)

さらに、同一の習慣でもパーフェクティブとして捉えたのが(17a)、インパーフェクティブとして捉えたのが(17b)である。

(17) a. 私は毎日、3km歩く。

b. 私は毎日、3km歩いている。

このパーフェクティブとインパーフェクティブの差が、(1)の「開けた」と(2)の「開けてみた」にもある。もちろん、「てみる」はテイル形のように1つのできごとの時間的內部構造を表すわけではない。しかし、「開けてみた」は、誰かがいるかどうかを確認したいという意図にもとづいてドアを開け、その結果として誰かがいたかどうかを知ったという一連の事態を表す。そして、市川(1990:214-215)に基づけば、動作主が一人称代名詞のときは「てみる」が話し手の発話時の意志を表すことができても、三人称代名詞のときは不自然な文になることがある((18)-(19))。

(18) 私は詩を書いてみる。

(19) ?彼女は詩を書いてみる。

それゆえ、「てみる」は、動詞が表わす行為だけでなく、意図・行為・認識の更新という一連の過程の内部を、話者／動作主の視点から表現するということができる<sup>2</sup>。

### 3. 複文と談話の中の「てみる」—先行研究の検討

#### 3.1 条件表現の前件中の「てみる」と後件の内容

2. 1で「てみる」の三つの要素について考察した。そして、〈その結果によって動作主が事態の認識を更新する〉について、「てみる」がその内容を具体的に指定することはないことを述べた。この「動作主による認識の更新」は、文レベルなら複文の後件として、談話レベルなら直後の発話として表すことができる。本節では、条件表現中の「てみる」についての研究を振り返り、後件との関係について考察する。そして、3. 2では、談話の中の「てみる」について先行研究を参照しながら考察する。

条件表現の前件の中の「てみる」の議論には、吉川（1975）と松木（1997）がある。吉川（1975：47）は、「～てみると」「～てみたら」「～てみれば」について触れ、「～てみると」と「～てみたら」は、2. で述べた三つの意味のうち、(Ⅲ)か、文脈によっては(Ⅰ)になっている（「～てみれば」については記述がない）。しかし、後件に関する記述はない。松木（1989）は、他動詞「見る」の多義を「意味的・機能的拡張と文法化の過程」（p. 1）として示し、それに基づいて「てみると」「てみれば」「てみたら」の詳細な分析を行い、「てみる」の意味と、多義の中での位置づけや文法化の程度を論じた。また、これらの条件表現の後件についての記述も行った。以下、松木（1989）の例を掲げる。

(20) お腹は空いていたはずだが、いざ食べてみると食欲がなかった。（p. 5）

(21) はじめのうち、ぼくは太郎にこの疲労感をおぼえていた。彼の家庭の状況を知ってみると、いよいよ手のつけられないような気がした。（p. 8）

(22) 町内の一部に病院設立に対する反対運動が起ったのも無理はなかった。しかし、いざ榆病院が完成してみれば、附近一帯の商家はすべてその恩恵を受けて成長したと言っても過言ではなかった。（p. 10）

(20) と (21) の「てみると」は、「ある結果や結論が出てくるもとなる動作を述べる」（p. 2）意味を持つ。そして、後件については、(20) は「その結果明らかになった新事実を述べる」（p. 5）、(21) は「その結果発生した主体の感情を述べる」「結果的なアスペクト」（p. 8）としている。この分析自体に異論はなく、2. 1で述べた分析から見直すと、前件と関連付けられた記述になっていることが示唆的である。後件は、(21) だけでなく (20) も、話者の認識を表していると解釈することができるし、(22) の後件も「と言っても過言ではなかった」によって話者の認識を明示している。これらから、後件が「てみる」が表す事態とは

別の事態であっても、やはり話者／動作主の認識であることを論じる余地が残っている。この点については4. で再考する。

### 3. 2 段落の構成要素としての「てみる」

「てみる」を、文法として、つまり文の一要素としてではなく、談話の一要素として論じた研究に笠松（1989）がある。笠松は、「てみる」の意味として、何かを試みる動作を表すということを認める一方で、それまでの記述に、動作主がなぜ試みるのかが含まれていないことに疑問を持ち、「ひろいテキスト」（笠松の論を見ると「文章」に相当すると思われる）を考察の対象にすることを主張した（p. 14）。そしてそこから、「動作をこころみる目的となる出来事」と「意図的にこころみる動作」「動作をこころみた結果となる出来事」のできごとの連鎖として「てみる」を分析し、三種類の段落の構造を見出した。それは、①「目的となる出来事をさしだす文」・「「てみる」を述語とする文」・「結果としてのできごとをさしだす文」（p. 15）、②「確認したい出来事」・「「てみる」を述語とする文」・「確認した結果としてわかった出来事」（p. 17）、③「「てみる」を述語とする文」・「動作のし手が期待する出来事が、たのしみやこちよさ、なぐさめというような、心理的な体験の場合」（p. 19）である<sup>3</sup>。

これは、「てみる」という小さな単位を、談話という、より大きな単位の中に位置づけようとする試みであり、2. で振り返った主要な文法研究とは異なるアプローチである。文法研究としての「てみる」の分析は、複文を上限とした範囲で「てみる」の文法的意味を論じるのに対し、笠松（1989）は談話レベルで「てみる」を捉え、出来事の連鎖の中で「てみる」がどのように用いられるかを考察し、さらに「てみる」が複文の前件に現れる場合（「てみると」「てみたら」など）へ論を進めた（p. 19ff）。

この、文章の中で「てみる」とともに出現する情報に注目した点は、「てみる」を談話レベルから捉えることの必要性を示唆し、「てみる」の語用論的分析あるいは談話分析的な研究へとつながる可能性を示している。しかし、本稿が笠松（1989）と異なるのは、「てみる」の意味に談話レベルと関わる特徴を認め、そしてそれによって、4. 以降で述べるように、「てみる」のあとに続く文の解釈、つまり意味の理解に注目するという点である。

## 4. 「てみる」による後件と後続文の解釈への影響

### 4. 1 条件表現における「てみる」と後続節の解釈

3. 1 では条件表現の前件に現れる「てみる」について、また、3. 2 では、段落の中の「てみる」について先行研究の概略を述べた。これらの先行研究から、語用論的な問題が浮かび上がってくる。それは、「てみる」が、後続する文の機能あるいは解釈に影響するのではないかという疑問である。以下、このことを複文の例としての順接条件文と談話の双方から考察する<sup>4</sup>。

まず、順接条件節を作る「と」「たら」「ば」「なら」<sup>5</sup>の典型的な用法についてであるが、益岡（1997：60ff）によると、「と」（益岡の用語では「ト形式」）は主に現実に観察された事態が継起的に生じることを表すという（pp. 60-61）。また、「たら」（「タラ形式」）は、「個別的な事態の依存関係」を表す（p. 50）。「ば」（「レバ形式」）は無時間的な一般的因果関係を表し（p. 49）、「なら」（「ナラ形式」）は、前件である事態が成立することを想定し、後件で話者の判断や態度を表現するという特徴がある（p. 58）。

次に、これに基づいて「てみる」を含む条件節を考察する。初めに「てみると」についてであるが、「てみると」のあとの節、つまり条件文の後件で「わかった」「知った」「理解した」など認識を表す動詞が述語になるとき、当然、「てみる」の「行為」と「認識の更新」が表現される。例は（23）である。

（23）私が改めて来客名簿を調べてみると、太郎が来ていたことがわかった。

一方、認識を表す動詞がない節でも、認識の動詞があるときと同じ解釈をすることができる。

（24）私が改めて名簿を調べてみると、太郎が来ていた。

（25）よく考えてみると、明日は祝日だ。

（24）の「太郎が来ていた」は、「私」が改めて調べた結果わかったこととして理解される。（25）でも「明日は祝日だ」は、話者の確認した内容である。これらの後件の解釈は、「と」の影響ではない。「と」は、継起的な事態を結合するだけであるから、後ろの節の解釈に影響しないのである。それゆえ、事実を述べる後件が話者の認識を表すのは前件の「てみる」によると考えられる<sup>6</sup>。

そして、「てみたら」も、「てみると」と同じく、後件が「てみる」の影響を受ける解釈が可能である。（26）は後件の述語によって認識の更新が明示される場合、（27）は明示されない場合で、後件は話者が前件の行為を行うことによって認識した事柄を表す。

（26）東京駅に行ってみたら、年末の帰省客でごった返していたことがわかった。

（27）東京駅に行ってみたら、年末の帰省客でごった返していた。

一方、「てみれば」は、慣用表現的な場合を除き、後続する節は話者の認識の更新を表すことができない。例えば、（28）の「考えてみれば」と（29）の「振り返ってみれば」は動作主なしに用いられる慣用表現である。このとき、後続する節は話者の認識の更新を明示できるし、また明示されなくてもそのように解釈できる（（30）－（31））。

（28）考えてみれば、その日は休日だったことがわかった。

（29）振り返ってみれば、あの頃はまだ子供だったと反省している。

（30）考えてみれば、明日は日曜日だった。

（31）振り返ってみれば、あの頃はまだ子供だった。

それ以外では、益岡（1997：48-49）が述べるとおり、「ば」は、一般則を述べるのが基本なので、個別的な事態を続けて述べるのは不適格である。

(32) ×東京駅に行ってみれば、年末年始の混雑ぶりがすぐにわかった。

(33) ×そのエッセイを読んでもみれば、作者の気持ちの変化がよくわかった。

(32) と (33) の「わかった」はある特定の機会での話者の発見を表すので、この二つの文は不適格になる。当然、認識の動詞なしの場合も不適格である。例は (34)－(37) である。

(34) ×東京駅に行ってみれば、年末年始で駅が混雑していた。

(35) ×そのエッセイを読んでもみれば、作者の気持ちに変化していた。

一方、後件が一般的な事態を表すなら、認識が改められたことを表しても適格な文である。

(36) 東京駅に行ってみれば、年末年始の混雑ぶりがすぐにわかる。

(37) そのエッセイを読んでもみれば、作者の気持ちの変化がよくわかる。

ただし、どちらの文でも、「わかる」のは、話者ではなく、「行った」・「読んだ」人物一般である。

また、「なら」が用いられる場合、後件は、前件の「てみる」の影響を受けない。「なら」の後件は前件を承けた話者の判断を述べる、つまり前件とは別の判断を述べる。それゆえ、後件は前件中の「てみる」が求める認識の更新を表すことができない。

(38) もし私が描いてみたなら、もっと違う絵になっただろう。

(39) ×もし私が描いてみたなら、もっと違う絵になったことがわかった。

(40) ×もし私が描いてみたなら、もっと違う絵になった。

(38) は、後件に「だろう」があることによって、前件を承けた判断であることが明示される。一方、(39) と (40) は、前件を引き継いだ認識になるために不適格になる。

以上から、「てみると」「てみたら」「てみれば」「てみるなら」を比較し、「てみると」と「てみたら」、さらに慣用表現として用いられる「てみれば」の場合、「てみる」が後続節の解釈に影響を与えることが明らかになった。

#### 4.2 第一文の「てみる」と第二文の解釈

上述の条件文の前件と後件の関係が、文と文の間に成り立つこともある。(23) は、次の例文のように、文の連鎖、すなわち談話として表現することができる。それが (41) である。その第二文は、「太郎が来ていた」ことが名簿の確認から明らかになったことを「わかった」によって明示している。

(41) 私は改めて来客名簿を調べてみた。太郎が来ていたことがわかった。

これを (42) と比較する。

(42) 私は改めて来客名簿を調べてみた。太郎は来ていた。

(42) の第二文は、事実を叙述していると同時に、(41) と同じく、その事実が確認した結果わかったことと解釈できる。

そして、この第二文の解釈への効果は、第一文が「てみる」ではなく「た」だと生じないか、あるいは生じにくい。

(43) 私は改めて来客名簿を調べた。太郎は来ていた。

(43) では、「調べた」ことと「来ていた」ことが列挙され、第二文は、新たにわかったことを意味することは不可能とは言えないものの、事実の叙述とみなされやすい。(42) と (43) のこの相違点は、「てみる」によって生じた違いである。

類例は (44)－(46) である。

(44) 東京駅に行ってみた。年末の帰省客でゴった返していることがよくわかった。

(45) 東京駅に行ってみた。年末の帰省客でゴった返していた。

(46) 東京駅に行った。年末の帰省客でゴった返していた。

(45) の第二文は、事実の叙述であり、話者が理解したことを表現していると解釈できる。一方、(46) の第二文は、(45) と比べると、話者の認識を表すと解釈することが難しい。

以上から、「てみる」が持つ〈その結果によって動作主が事態の認識を更新する〉という要素が、後続文の解釈に影響していることが示された。

## 5. 談話の中の「てみる」

### 5.1 「～てみる」と「表現意図」—市川 (1990) から

当然のことながら、「てみる」の後続文として話者の認識の更新を示す文がいつも置かれるわけではない。談話の中の発話と発話は、規則ではなく、グライスの協調の原理と会話の格率のような、原理や原則によって続いていくからである。それゆえ、おそらく多様な内容・機能を持つ発話が「てみる」に後続すると考えられる。しかし、そのすべてを調査することは本稿の目的ではない。本章では、談話の中の「てみる」の先行研究をまず概観し、その上で、助言と指示、挑戦を表す「てみる」を、話者の認識の更新という要素と、インパーフェクティブ的性質、そしてブラウンとレヴィンソンのポライトネス理論 (Brown and Levinson, 1987) に基づいて考察する。

談話の中の「てみる」に注目した研究に市川 (1990) がある。市川は、話しことばの中での「てみる」と「ておく」、「てくる」の使用が、それらの文法的意味とどのように関わるかを論じた。具体的には、これらが話し手の意志表現として用いられるときの「文形式と表現意図との関わり」(p. 210) について考察している。この「表現意図」とは、命令や質問、叙述、応答などである。

この「てみる」についての考察に、市川によれば「主語」、本稿での動作主が一人称代名詞、つまり発話者である場合と、三人称代名詞である場合とで、適格性に差があるという指摘がある。例えば、「私は彼女に手紙を書いてみる。」は適格であるのに対し、「×彼は彼女に手紙を書いてみる。」は不適格であるという (p. 214)。そして、会話資料から、「てみる」の使用のパターンを六種類 (pp. 216-219)、表現意図も六種類認めている (p. 219)。

その使用パターンと表現意図のうち、本稿と重なるのは、使用パターンの「助言、依頼・要

求表現」(p. 218)と、表現意図の「心的態度を間接に表すことで丁寧さを表す」(p. 219)である。助言の場合、『「ためしにやったら」どうかと自分の助言を間接的に表現する』こと、試行が丁寧さの表現であること、また、依頼と要求の表現でも、「～てみる」が要求をやわらげることが指摘されている(p. 218)。これらの指摘は正しいと考える。また、談話から文法的意味を見るという観点も本稿と共通するものがある。しかし、本稿で用いている「てみる」がない形式との比較が十分になされていない点と、同じ発話行為に対して「てみる」が丁寧な形式となる動機には触れられていない点は異なっている。

## 5.2 助言・指示・挑戦の「てみる」

本稿で分析の対象とするのは、「てみる」を含む助言と指示、挑戦の表現である。例は以下の通りである。

(47) (教員が一年生に) 大学の図書館で文献を探してみたらどうですか。(助言)

(48) (上司から部下に) この案を検討してみてください。(指示)

(49) (教員から学生に) この問題を考えてみましょうか。(指示)

(50) うちのチームに勝てるものなら勝ってみろよ。(挑戦)

(49) は、例えば教室で教員から学生に、問題を解くことを指示するときにも用いられるし、また、教員が説明をするときの前置きとしても使える。ここでは指示としたが、実質的には「一緒に考えてみよう」という共同行為の提案である。

上記四つの例文は、発話行為という点では、次の(51)–(54)と同じである。

(51) (教員が一年生に) 大学の図書館で文献を探したらどうですか。(助言)

(52) (上司から部下に) この案を検討してください。(指示)

(53) (教員から学生に) この問題を考えましょうか。(指示)

(54) ?うちのチームに勝てるものなら勝てよ。(挑戦)

(47)–(50) と (51)–(54) は、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論から見れば、どれも話し手が聞き手に何らかの行為をさせるので、話し手から聞き手へのフェイス威嚇行為(face-threatening act, FTA)である(pp. 65-66、日本語訳p. 85)。そして、市川(1990)が指摘したように「てみる」には緩和の作用があるとしたら、それはなぜなのか。以下、ポライトネス理論から考察する。

## 5.3 Brown and Levinson のポライトネス理論

Brown and Levinson (以下B&L) のポライトネス理論では、コミュニケーションの参加者は、ネガティブ・フェイス(negative face)とポジティブ・フェイス(positive face)を持つとされる。ネガティブ・フェイスとは「自分の行動を他者から邪魔されたくないという欲求」、ポジティブ・フェイスとは「自分の欲求が少なくとも何人かの他者にとっては好ましいものであってほしいという欲求」である(p. 62、日本語訳p. 80)。

そして、命令や依頼などのコミュニケーションの中で行われる行為には、これらのフェイスを脅かす行為がある。それがフェイス威嚇行為である。命令や依頼、警告などは相手のネガティブ・フェイスを威嚇する。また、軽蔑や侮辱、不賛成などは相手のポジティブ・フェイスを威嚇する。

話し手は、FTAを行わざるを得ないとき、いわば課題を背負うことになる。B&Lによれば、「内容を伝えたいという欲求」と「効率よく、あるいは迅速でありたいという欲求」、「相手のフェイスを保持したいという欲求」があり、効率性・迅速性の欲求が相手のフェイス保持の欲求を上回らなければ、話者はFTAの程度を最小化する戦略を取るようになる (pp. 68-69、同p. 89)。その戦略には、ポジティブ・フェイスに向けられる「ポジティブ・ポライトネス (positive politeness)」とネガティブ・フェイスを補償する「ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)」がある (p. 70、同p. 91)。前者は、「接近を基に (approach-based)」相手のポジティブ・フェイスを肯定することによって、FTAを緩和する。反対に、後者は、「回避を基に (avoidance-based)」した戦略であり、相手のネガティブ・フェイスを尊重することでFTAの程度を下げる働きがある。

## 5.4 「てみる」とポライトネス・ストラテジー

### 5.4.1 助言の「てみる」

まず助言の表現の中にある「てみる」と動詞のタ形を用いた表現を比較し、次に「てみる」のポライトネスを考察する。

(55) (教員が一年生に) 大学の図書館で文献を探してみたらどうですか。(=(47))

(56) (教員が一年生に) 大学の図書館で文献を探したらどうですか。(=(51))

(55) と (56) は、初学者である聞き手が必要な文献がどこにあるかわからず、それを見かねた教員が学生に助言することを表すものとする。そのため、話し手が伝えたいことは「図書館で文献を探せ」である。そして (56) は、慣用的な表現形式「動詞+たらどうですか」を用いて、そのことだけを伝えている。それに対し (55) は、「てみる」によって、探すことに加えて、その結果の状態によって聞き手の認識が更新されることも伝達する。それゆえ、コンテキスト中に文献が見つかることを示唆する内容があれば、聞き手に対して「きっと見つかるだろう」という期待を抱かせることになる。次の (57) は、その期待を (58) より明確に伝えている。

(57) 大学の図書館ならその分野の本は必ず置いてあるから、探してみたらどうですか。

(58) 大学の図書館ならその分野の本は必ず置いてあるから、探したらどうですか。

ポライトネス理論から見れば、(55) と (56)、そして (57) と (58) は、話し手が聞き手に文献を探すように言っているのだから、話し手による聞き手のネガティブ・フェイスへの威嚇である。では、(55) と (57) は、(56) と (58) に比べてどのようにFTAを緩和しているだろうか。

まず、「どうですか」と相手の意志を尋ねることによって、つまり、「どう」を用いることで、「はい／いいえ」の二者択一の強制を避け、相手の意志を尋ねることで、ネガティブ・フェイスへの補償が行われる。その点で (55)・(57) は (56)・(58) と変わらない。しかし、(55)・(57) は、「てみる」によって、伝達内容を、「図書館で文献を探せ」だけでなく、「そうすることで文献が見つかるかもしれない」という結果の状態にまで広げることで、探すことをより大きな事態として表現し、その結果、FTAの程度を弱めることになる。また、これを、「図書館で探せば、文献があるかどうかわかる」という条件と帰結としてみるならば、伝達の中心が後件にずれることによって、つまり指示から未来の状態の予想へとずれることによって、前件のFTAが緩和されると考えることもできるだろう。さらに、(55) と (57) を比較すると、前件の内容によって、「文献が見つかるかもしれない」「きっと見つかるだろう」という会話の含意がより明確に伝えられ、FTAの程度が (55) に比べて低下する。

#### 5. 4. 2 指示の「てみる」

5. 2で挙げた例を再掲する。

(59) (上司から部下に) この案を検討してみてください。(指示) (= (48))

(60) (上司から部下に) この案を検討してください。(指示) (= (52))

(59) と (60) は、5. 4. 1の例と同じく、話し手が聞き手に「検討」を指示することが、聞き手のネガティブ・フェイスへの威嚇行為となる。どちらも「ください」によってそのFTAが緩和されているものの、(60) より (59) の方が、いわゆる柔らかい表現である。それは、助言の「てみる」と同じく、「検討する」ことが、「検討してみれば、その結果がわかる」という、より大きな過程の一部として伝えられているからである。

さらにこの例を、上司と部下という関係ではあるが、一つのプロジェクトを共同で実行する立場にある場合と考えると、別のポライトネス・ストラテジーが見いだされる。そこでは、話し手と聞き手が、役割は違っても一つの目的に向かう立場にあるとしよう。その場合、聞き手が「この案を検討する」ことによって何かを知ることや考えつくことまで伝えたとしたら、当然、その結果を話し手に伝えることも想定できる。これは、(60) と対照的である。(61) は、話し手が検討することだけを指示して、その後の事態については相対的に明確に伝えていない。それゆえ、(59) は、話し手と聞き手が共同行為者であるということが (60) よりも明確に聞き手に伝わることになる。これは、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの「SとHは協力者であることを伝えよ」(Brown and Levinson, 1987: 125、日本語訳p. 171) に相当する(Sは話し手、Hは聞き手)。したがって、「てみる」による指示は、ネガティブ・フェイスの威嚇を緩和するネガティブ・ポライトネス・ストラテジーであるだけでなく、場合によってはポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの性質を持つことになる。

次の(61) と (62) であるが、これらもまた、発話行為としては話し手から聞き手への指示である。

(61) (教員から学生に) この問題を考えてみましょうか。(=(49))

(62) (教員から学生に) この問題を考えましょうか。(=(53))

しかし、述語に「ます」の意志形が接続していて、動作主は話し手と聞き手である。そのため、まず、聞き手への指示が話し手と聞き手の共同行為として表現されていることから、(61)と(62)では、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが用いられていることがわかる。

そして、(61)では、すでに述べたように、「てみる」によって聞き手のネガティブ・フェイスへの威嚇が緩和される。さらに、「てみる」のインパーフェクティブ的な特性によって、「考える」ことと、それによって話し手と聞き手の認識がともに更新されていくことが意味される。それに対し、(62)にその意味はなく、「考える」という行為への話し手と聞き手の関与度は、(61)より低い。場合によっては、(62)は、突き放したような素っ気ない印象を与えるかもしれない。それゆえ、「てみる」を含む共同行為としての指示は、この点でもポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして成り立っている。したがって、(61)のように、「てみる」を用い、かつ、共同行為として指示を表現する場合、聞き手へのネガティブ・ポライトネス・ストラテジーと、2つのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが組み合わせられているのである。

類例は、勧誘の「てみる」である。

(63) (話し手が食べているお菓子の一部を差し出して) これ、食べてみない？

(64) (話し手が食べているお菓子の一部を差し出して) これ、食べない？

いずれも否定の「ない」と疑問文が用いられていることで、聞き手のネガティブ・フェイスに配慮している。それに加え、(63)は、食べた結果、つまり味わうこと、を相手に伝え、その分、(64)に比べ、相手のネガティブ・フェイスへの威嚇が緩和される。

また、説明の前置きに用いられる「てみる」も、話し手と聞き手が共同行為者として見立てられる、認識の更新に重点が置かれる点で共通している。

(65) 次に、この現象について考えてみましょう。最初は、資料1についてです。……

(65)のような表現は、講演や講義で用いられるし、文章の中で用いられれば読者に語りかける印象を与える。それは、「てみる」によって話し手と聞き手が共同行為者であることが示され、続けて解説がなされることで、ともに認識を更新していくからである。实例は(66)である。

(66) 鉄鋼大手五社のエンジニアリング部門の事業規模を、いわゆるエンジニアリング専門三社(千代田化工建設、日揮、東洋エンジニアリング)と比較してみよう。表3-2はエンジニアリング専門三社の事業規模を示している。八十四~八十八年度の売上高はいずれの年度においても鉄鋼大手五社が上回っている。特に八十八年度は(以下略)(国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から。検索は「中納言」を用いた。)

### 5.4.3 挑戦の「てみる」

最後に、本稿で「挑戦」と呼んだ「てみる」を検討する<sup>7</sup>。筆者の直観では、(67)と比べて(68)はやや不自然である。

(67) うちのチームに勝てるものなら勝ってみろよ。(=(50))

(68)? うちのチームに勝てるものなら勝てよ。(=(54))

このような「挑戦」—あるいは「挑発」—は、(67)であれば聞き手のチームが勝てないこと、つまり聞き手のチームが勝つことに対する不同意を強く表明している。これは、B&Lによれば、聞き手のポジティブ・フェイスの威嚇である(B&L, 1987: 66、日本語訳p. 86)。すなわち、(67)は、聞き手の「強くありたいことを認めてほしい」という欲求に否定的な評価を与えているのである。

しかし、それは(68)によっても伝達できると思われるのに、なぜ(67)がより自然なのだろうか。それは、2. で述べた筆者の「てみる」の分析に従えば、結果として生じる事態によって聞き手が認識を更新することを意図するからである。(67)は、その内容を単純化すれば、話し手が聞き手に「試合をして勝つと思うなら、実際に勝て」と命令しているかあるいは要求しているかである。しかし、「てみる」の意味を十分に考慮すれば、話し手は聞き手に対して、「試合をすれば負けるだろう。それをよく理解しろ」という結果を改めて認識することを求めていることがわかる。それゆえ、この「てみる」による「挑戦」は、動詞が表わす行為そのものに焦点を合わせているのではなく、結果の認識を聞き手に突きつけることによって成り立っていると言える。

それに加えて、「てみる」のインパーフェクティブ的な特性によって、話し手が聞き手に事態を内側から見せ、その意味で両者が視点を共有し、距離が近くなっている。もし話し手と聞き手が友好的な関係にあれば、「てみる」を用いた(69)は(70)よりも親しさを表すことができる。

(69) (店主が友人に) 今度、うちの店に寄ってこない?

(70) (店主が友人に) 今度、うちの店に寄らない?

これらの例から、「てみる」の働きによって、話し手と聞き手の距離が近くなっていると考えられる。それゆえ、(67)で示したような「てみる」による挑戦の表現は、(68)のような命令形のみ表現に比べ、いわば距離が近いだけに生々しく、相手への侮蔑が伝わると考えられる。

## 6. おわりに

本稿では、談話の中で用いられる「てみる」の観察を背景に、まず「てみる」の文法的意味の研究を振り返った。そして、談話中の用法を参考に、「てみる」が表す事態を一連の過程として捉え、その意味の仮説として〈話者／動作主がある意図を持って〉〈ある行為を行い〉〈その結果によって話者／動作主が認識を更新する〉を提示した。そして、この「てみる」の意味

は、アスペクト研究の「インパーフェクティブ」に類似していることを指摘した。それにもとづいて、複文と文章の中の「てみる」の研究を概観し、「てみる」が、条件文の後件と「てみる」に後続する文の解釈に影響することを論じた。そして、談話の中の「てみる」の事例分析として、助言と指示を表す場合を、B&Lのポライトネス理論から検討し、フェイス威嚇行為を緩和していることを見た。さらに、「挑戦」の用法を検討し、その意味に、インパーフェクティブ的の性質に由来する距離感の近さと、結果の認識の更新の意味が働いていることを述べた。

以上、本研究では、談話中の情報の配列を考慮して文法的意味を考察し、また文法的意味からフェイス威嚇の緩和という語用論的現象を説明することができた。その一方で、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の豊富な例に触発されるところはあったものの、それを活用しきることはできなかった点は今後の課題であろう。

### 【注】

- 1 高橋（1976）（「すがたともくろみ」）の初出は、1969年に開催された「教育科学研究会国語部会」の「文法講座のテキスト」とのことである（高橋，1976：149）。
- 2 「ておく」の分析に類似した分析がある。高橋（1976、1999）は、「ておく」に「すがた動詞」と「もくろみ動詞」の二つの性質を認めている。また、森田（1989：234-235）の記述では、「意志動詞＋ておく」が表す事態に、事後の予想と動作、結果の事態を、大場（2005）では「準備性」と「動作」、「状態の保持」の3つを読み取ることができる。
- 3 本稿では検討する余裕がなかったが、成（2012：74ff）は、笠松（1989）を基礎にして、「てみる」の文脈的特徴を『『してみる』動作へとかりたてる原因』・『『してみる』動作』・『『してみる』動作を行った後の結果』と分析している。
- 4 条件文以外にも「てみる」が用いられることがある（田中，2000：104ff）。
- 5 益岡（1997：60）はト形式を他の形式と性格の異なるものと考えるが、ここではいわば広義の順接条件節として一括して扱う。
- 6 筆者の直観では「×私が改めて名簿を調べてみると、太郎が来た。」は不適格か不自然である。また、「よく考えてみると、明日は祝日 {だった／だったのだ}。」の方がより自然である。この直観が正しければ、「てみると」に後続する節の制限について検討の余地があることになる。
- 7 本稿とは異なる視点から森（2014）が「てみる」を「条件命令文」として扱い、子細な分析を行っている。

## 【参考文献】

### [辞書・コーパス]

北原保雄（編）『明鏡国語辞典』第三版、大修館書店、2021年

国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/index.html>

### [文献]

市川保子（1990）『～てみる』『～ておく』『～てくる』の表現意図—話し手の意志表現を中心に—  
『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』5：209-228

大場美穂子（2005）「補助動詞『おく』についての一考察」『東京大学留学生センター教育論集』14：  
19-33

笠松郁子（1989）『～してみる』を述語にする文『教育国語』98：14-23 教育科学研究会・国語部会

国広哲弥（1982）『意味論の方法』大修館書店

成知炫（2012）『現代日本語の補助動詞：「～してみる」と「～してみせる」の意味・用法の記述的研究』  
東京外国語大学院地域文化研究科博士論文 <https://tufts.repo.nii.ac.jp/records/1029>

高橋太郎（1976）「すがたともくろみ」金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』117-153 むぎ  
書房

——（1999）『～シテオク』と『～シテアル』の対立について『関西外国語大学研究論集』70：81-95  
関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部

田中聡子（2000）『～てみる』の意味記述の試み『言葉と文化』1：93-110 名古屋大学大学院国際言  
語文化研究科日本語文化専攻 <https://nagoya.repo.nii.ac.jp/records/2001254>

日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法2』くろしお出版

益岡隆志（1997）『複文』くろしお出版

松木正恵（1997）『～見る』の文法化—『～てみると』『～てみれば』『～てみたら』を例として—『早稲田  
日本語研究』5：1-12 <https://waseda.repo.nii.ac.jp/records/28194>

森英樹（2014）「「Vてみろ」条件命令文のモダリティと再分析構造」『言語研究』145：1-26

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

吉川武時（1975）『～てみる』の意味とそれの実現する条件『日本語学校論集』2：36-51 東京外  
国語大学外国語学部附属日本語学校 <https://tufts.repo.nii.ac.jp/records/7281>

Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987[1978]) *Politeness: Some universals in language usage*.  
Cambridge University Press. 田中典子（監訳）齊藤早智子他（訳）『ポライトネス 言語使用におけ  
る、ある普遍現象』研究社 2011年

Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge University Press.

‘Verb + *te* + *miru*’ in Discourse:  
Analysis of Its Grammatical Meaning, Interpretation of  
the Subsequent Clause and Sentence, and Face-threatening Acts

Tomohiko Yoshida

Abstract

This paper examines the grammatical meaning of the verb + *te* + auxiliary verb *miru* (*temiru*) construction in Japanese, taking into account its use in complex sentences and discourse. It proposes an analysis suggesting that this form features three semantic attributes: intention, action and updating one’s understanding. In addition, this analysis describes two pragmatic phenomena. The first is that both clauses following *temiruto* and *temitara* and sentences immediately following *temiru* can be interpreted in accordance with the grammatical meaning of *temiru*; that is, they represent the speaker’s recognition rather than merely a statement of an event. The second is that *temiru*, in the discourse of advice, direction and challenge, redresses or enhances the degree of face-threatening act in Brown and Levinson’s theory of politeness.

Keywords: *temiru*, auxiliary verb, *miru*, politeness